

序

本書『源氏物語逍遙 村井利彦著述集』は、故村井利彦氏の遺著である。昭和41年から平成21年の40余年の間に書き溜められた、氏の論考を中心に編集されている。

村井氏が他界されたのは平成25年9月19日。前年、長らく奉職された神戸山手大学を退職され、これから御自身の研究成果をまとめ、公刊しようという矢先の不幸事であった。紫式部学会編「むらさき」第九輯（昭和46年6月26日発行）から、43年間の永きに亘り、一度も休むこと無く「源氏物語研究文献目録」を連載され、紫式部学会編の年報としての該誌の声価の堅持に大きく寄与されたのであった。「むらさき」誌第五〇輯（平成25年12月1日発行）掲載分の再校ゲラ刷りが出たのが逝去前日の9月18日であったとの報告を聞いている。この「源氏物語研究文献目録―平成24年分―」が、氏の御遺稿となったのである。

「源氏物語研究文献目録」は、年間に刊行された源氏物語に関する単行本、分冊週刊誌、雑誌特集から雑誌・紀要にいたるまで、その細目が漏らされず収録されている。「むらさき」は平成26年12月に第五一輯が発行されるが、そこに至るほとんどの「源氏物語研究文献目録」が氏の御尽力によるものである。国文学研究資料館編『国文学年鑑』が平成17年度版をもって休刊してからは、多

くの研究者にとってかけがえない源氏物語研究文献資料となった。また、雑誌「むらさき」の学術的価値を一層高めていることは言うまでもなく、誠に感慨に堪えない。

「源氏物語研究文献目録」自体の連載開始は、武蔵野書院からの発行の決まった「むらさき」第三輯（昭和39年11月30日発行）からであり、初回作成者として上坂信男氏のお名前が見える。上坂氏は村井氏の恩師であり、まさに五十嵐力―岡一男と連なる早稲田文学研究の系譜であろう。

前述のように、本書は、村井氏が40年余に亘って書き溜められた論考を掘り起こして編集されたものである。五十嵐、岡、上坂と連なる早稲田文学研究のひとつの峯としての、故村井利彦氏の著述を集めた本書から、文学研究の姿勢、方法を学んでいただきたいのである。

永年に亘る故村井利彦氏の学恩に報い、紫式部学会の当事者として、謹んで序文を呈するものである。

平成26年11月

秋 山 虔

（紫式部学会前会長）

源氏物語逍遙

村井利彦著述集

―目次―

序	紫式部学会前会長	秋	山	虔	i
凡例						ix

I 卷々と人物

桐壺の夢						5
帚木三帖仮象論 第二稿						35
源氏物語若紫卷論——若紫の思念——						65
夕顔の西の対、玉鬘の西の対——源氏物語、しづのをだまさ考——						81
紫のゆかり——若紫と以後の卷々——						97
花散里の位置						109
朝顔齋院の作用						125

源氏物語螢卷——「物語論」のために——	151
檀の木の下の下——源氏物語篝火卷管見——	175
若菜の前景	187
若菜の構造	207
宇治の眺望——源氏物語終末論のためのノオト——	223
浮舟の行方——源氏物語墓守論のために——	241
Ⅱ 物語の思想	
楽府・諷諭詩・源氏物語	261
嵯峨野釈迦像へのまなざし——源氏物語の仏教思想断面——	279
母北の方の熱望——源氏物語の出発——	283
紫上によるべ、帰天の思想——源氏物語の女人往生——	299
髭黒の長征——源氏物語の政治——	303
輔翼の思想——頭中将と光源氏、柏木と夕霧の友情——	309
夜光る玉——海龍王・明石一族・神仙源氏物語——	323
Ⅲ 文学の周辺	
業平より行平へ——源氏物語教育論の外延——	341
岡 一 男（昭和の源氏物語研究史を作った十人 四）より	345
事例報告——披露宴は後の祭り——	361

初出一覧	377
村井利彦 略歴	380
村井利彦 講演会等開催記録	382
村井利彦著「爪印 <small>つまじりし</small> 」について	385
写真	387

凡例

- 一、本書は、故村井利彦氏（以下、おもに氏とする）の遺された論考等を一書にまとめたものである。著者亡き後の論考の点検には困難を伴った箇所があるが、極力発表当時の形を尊重しつつ、正確を期した。
- 一、可能な限り、氏の著述を集めたが、本書に掲載された以外の論考が存在する可能性もある。読者のご教示を仰ぐものである。
- 一、氏は、四十三年の永きに亘り、雑誌「むらさき」に、献身的に『源氏物語研究文献目録』を連載してこられた。その学恩に報いるため、紫式部学会が編集協力に携わった。
- 一、論考は、『源氏物語』に限らず底本や出典が確定できないものもある。これらについては、あとう限り調査した結果、不明なものは初出論文そのままとした。
- 一、漢字は現在通行の字体に改めたが、引用文についてはこの限りではない。また、固有名詞等には正字体を用いたものもある。
- 一、敬称は、すべて初出論考そのままとした。
- 一、本書が、国文学研究者故村井利彦氏の約五十年に亘る研究成果の一端として、永く後世に伝えられることを強く願うものである。

紫式部学会
武蔵野書院編集部

